

●書学書道史学会

会 報

第 3 号

平成14年(2002)6月1日発行

編集・発行
書学書道史学会
事務局東京都渋谷区桜丘町29-35
〒150-0031 美術新聞社内
TEL(03)3462-5251(代)
FAX(03)5489-7288(直)会 告
会則の一部変更について(要請)

理事会はこの度、諸般の状況に鑑み、会則第24条の規定に基づいて、
①第6条に「参事 若干名」の新項目を追加する、

②この参事の選任に関連して「参事は本会の名誉会員推挙基準に合致する理事・監事の役職にない満70歳未満の会員について理事会が推挙し、理事長が任命する。理事長は会務について参事に諮問することができる。」の規定を新条項として加える、

の会則変更案を決定致しましたので、ここに発議し、会員各位に投票による承認を求めます。なお、今回の投票手続きは次により行います。



一、今年度より毎年配布することとなった学会の「14年度会員連絡票」(会員原票)の今年度版表面宛名下に「投票」欄を設ける。

二、投票は「連絡票の提出期限」(7月10日消印有効)をメット日とする。

三、変更案に対する「賛」「否」を問い、そのいずれかまたは「棄権」の意思表示のあったものを投票とみなして集計する。 以上

書学書道史学会理事会

会員各位

●第Ⅶ期新役員名簿決定

任期満了に伴う役員改選選挙が、去る十二月十五日告示、二月十五日(三月十五日)を投票期間として実施されました。各位のご協力を深謝致します。その後、選挙管理委員会による開票、当選者決定を受けて、三月三十一日に開かれた第三十回臨時理事会において、以下の「第Ⅶ期新役員名簿が決定しましたのでお知らせします。今期新役員の任期は、平成十六年三月三十一日までとなります。(○印＝新任)

【理事長】興膳 宏(京都国立博物館館長)

【副理事長】杉村邦彦(京都教育大学教授) 〓 国際局長 〓

○ 田中 有(大東文化大学教授)

【常任理事】○ 新井儀平(大東文化大学教授)

大野修作(京都女子大学教授) 〓 学術局長 〓

大橋修一(埼玉大学教授) 〓 編集局長 〓

菅原 晋(カリタス女子短大講師) 〓 事務局長 〓

澤田雅弘(群馬大学教授)

中村伸夫(筑波大学助教授)

藤木正次(日本大学教授) 〓 財務委員長 〓

○ 古谷 稔(大東文化大学教授) 〓 国内局長 〓

【理 事】石田 肇(群馬大学教授)

河内利治(大東文化大学助教授)

杉浦妙子(二松学舎大学講師)

鈴木晴彦(昭和学院短大教授)

○ 辻井義昭(北海道教育大学札幌校教授)

○ 鶴田一雄(新潟大学助教授)

○ 名児耶明(五島美術館学芸部長)

○ 福田哲之(島根大学助教授)

横田恭三(跡見学園女子大学助教授)

○ 浦野俊則(千葉大学教授) 〓 選管委員長 〓

○ 野中浩俊(新潟大学教授)

○ 小川博章、柿木原くみ、下野健児(大念)、

高城弘一、富田淳、○ 森岡隆

【監 事】

【幹 事】

本年度・第13回大会開催案内

本年度の第13回書学書道史学会大会について、お知らせします。大会は今年も、11月15日(金)から17日(日)までの3日間にわたり、京都教育大学Ⅱ写真Ⅱほかで開催する運びとなりました。詳細プログラムや発表者、交通案内等は10月発行予定の「会報第4号」でお知らせしますが、現在



までに固まっている大要は以下の通りです。

○日程 11月15日(金)午後4時30分から第31回定例理事会(於京都ガーデンパレス)

11月16日(土)午前9時受付開始、9時30分から総会・研究発表・懇親会を順次行い、午後8時終了予定。合わせて、正午から午後4時まで、「京都学派とその周辺」の特別展示を予定。

11月17日(日)午前10時現地集合、京都国立博物館にて特別鑑賞会を予定。

○会場 ①京都教育大学(京都市伏見区深草藤森町1)・藤森神社参集殿(京都教育大学の西隣)京都駅からJR奈良線で約15分乗車、藤森駅から徒歩約7分。または、京阪電鉄墨染駅下車、徒歩約10分。

②京都国立博物館(京都市東山区茶屋町)京阪電鉄七条駅下車、徒歩約5分。京都駅から市バス202・206・207・100系統で約5分乗車、博物館三十三間堂下車すぐ。

○備考 Ⅱ宿泊については、京都市内という条件にも照らし、今年も各自で願うことになりました。

(国内局・'02京都大会運営委員会)

大会発表題目

第1回大会(東京大学)発表題目

- ①日本出土「魏紀年」四鏡の銘文と字体 福宿孝夫
- ②泰山金剛経と尖山摩崖「北周要経洞摩崖」(民国十四年刊印本)をめぐって 松村一徳
- ③「檢」考 大庭脩
- ④顔真卿書「殷夫人顔氏碑」について―顔真卿の晩年の書像に関する一考察 宮崎洋一
- ⑤高山寺藏本「篆隸萬象名義」の篆体について 福田哲之
- ⑥禪と書芸術について 何勁松
- ⑦古書論にみられる用筆理念の変遷 森常雄
- ⑧調停考 澤田雅弘
- ⑨「手本体」の形状的特質について 木下政雄

第2回大会(東京大学)発表題目

- ①水野疎梅とその交流 横田恭三
- ②伝殷墟出土「聖印」の並字形について 金洋東
- ③「才葉抄」と藤原教長 杉浦妙子
- ④朝鮮書道史と副島種臣 豊島嘉徳
- ⑤日本の「木簡」について 駒井定夫
- ⑥新出土の木簡資料―甘肅省における国際簡牘学会に因んで 田中有

第3回大会(京大)発表題目

- ①明代における狂草の流行とその様相 下野健児
- ②劉墉の書跡に見る書法観 鈴木洋保
- ③會津八一の印字 神野雄二
- ④鵬斎以降の書流の行方 岩坪光雄
- ⑤「書画書録解題」と「画法要録」 大野修作
- ⑥簞筆・珥筆そして白筆 西林昭一

第4回大会(大東文化大学)発表題目

- ①形態から行へ 萱のり子
- ②枢銘から篆額へ 大橋修一
- ③北魏の能書家に関する一考察 勝目浩司
- ④中央研究院所蔵の拓本資料―仏教碑銘を中心として 八木宣諦
- ⑤尾上榮舟の書風の変化に関する一考察 松本昭彦
- ⑥河北定県北莊漢墓刻石の書丹者 飯山三九郎

第5回大会(愛媛堂美術館)発表題目

- ①武威磨咀子第4号漢墓出土「粉書」の書法について 中村伸夫
- ②北朝摩崖刻経について 古川徹
- ③「秋萩帖」所収歌についての再検討 高城弘一
- ④祝允明の小楷書法について 下野健児
- ⑤書学基礎論としての「Carabonage」の現状と課題 萱原晋

第6回大会(諸橋徹次記念館)発表題目

- ①鳥篆考 鶴田一雄
- ②内藤湖南と澄懷堂収蔵の中国書画 杉村邦彦
- ③中華民国故宮博物院本「古京遺文」について 鈴木晴彦
- ④線・形象・時間 萱のり子
- ⑤「淳化閣帖」王羲之の書蹟における否定詞「不」の効用について 細谷一郎
- ⑥新しく出現した获生祖徠の書跡 大庭脩
- ⑦小萬柳堂主 康泉と吳芝瑛 鈴木洋保
- ⑧近世日本における隷書体受容に関する一考察 岩坪光雄

本年度・第13回大会研究発表募集

今秋の第13回大会は、別項でご案内の通り、京都市の京都教育大学キャンパスを中心にして開催する運びとなりました。例年通り、会員各位より下記の要領で研究発表の申し込みを受け付けます。書学書道史ならびに関連諸分野の斬新な研究成果の発表を期待します。ぜひ、奮ってお申し込み下さい。

記

- 1) 発表日時：平成14年11月16日(土) 午前～午後 (発表者が多い場合は、分科会方式を採用します)
2) 発表時間：各40分間 (質疑応答時間10分を含む)
3) 申込方法：適宜の形式の「大会発表申込書」に標題・氏名を明記し、別途800字程度のレジюмеを添えること
4) レジюмеの形式：レジюмеは、10月発行の国会報第4号に付録として添付し、全会員に事前配布する予定です。形式はB5判に概ね縦20×横14cmのスペースを各発表者に割り当て、提出されたものをそのまま、または縮小転写して軽印刷にかけますから、このプロポジションに仕上げて提出して下さい。ワープロ印字、手書き、縦書き、横書きを問いません。図版は掲載不可。この1ページ内に標題・氏名も明記して下さい。
5) 申込締切：平成14年7月25日(木) =必着=
6) 決定と通知：7月末の大会運営委員会で決定し、8月上旬に個別にお知らせします。

※本大会発表については、学会誌『書学書道史研究』第13号(平成15年秋刊)への論文投稿申し込みがあったものとして扱われますので、改めての投稿申し込みは不要です。
※この原稿の締切は、来年3月末日です。投稿原稿は、査読委員会で採否が決定されます。学会誌掲載についてご不明の点は、編集委員会まで文書でお問い合わせ下さい。
※大会発表申込書とレジюмеは、封筒に「レジюме在中」と明記して下記へお送り下さい。なお、事故を避けるため、出来るだけ配達記録郵便をご利用下さい。

(送り先) 〒150-0031東京都渋谷区桜丘町29-35 ヴィラ桜ヶ丘ビル7F
書学書道史学会国内局・'02京都大会運営委員会 宛

- 9 滑川瀧知について 柴田光彦
10 寛山の将来した書法資料―山本家資料を中心に 大橋成行
◆第7回大会(近つ飛鳥博物館)発表題目
1 ①「手筆」をめぐるつて 幸福香織
2 小曾根乾堂研究 神野雄二
3 ④「玉梅花禽論」における金文書派の体系 菅野智明
4 ⑤陸游の王羲之観 森上幸義
5 書跡における平面と堅面鑑賞について 木下政雄
◆第8回大会(淑徳大学)発表題目
1 李陽冰の書法 鈴木洋保
2 桂馥旧藏(高山三閣諸銘) 卷一「開母廟石闕銘」を主として 西林昭一
3 居延甲渠塞における部隧の配置について 吉村昌之
4 吐魯番出土文書に見られる王羲之習書―阿斯塔那179号 墓文書(ZTJAM179B)を中心に 福田哲
5 新発見の洛陽存古閣藏石拓本 飯山三九郎
6 日本における初期将来仏典受入基盤について―一切経写経の意味するもの 高井基子
7 中国西安出土秦封泥の検証 松村一徳
8 秋舞道人の書法への一考察 森上洋光
9 「あしで」の美術史的考察 増田孝
10 江戸末期に舶載された単帖の資料 大庭脩
◆第9回大会(筑波大学)発表題目
1 仮名発達史における難波津の歌 森岡隆
2 金文「唯」字考 金洋東
3 官奴説考 祁小春
4 楊守敬「激素飛清閣評碑記・評帖記」について 中村史朗
5 金印再考 佐藤法雄
6 雁塔聖教序の線に関する考察 荒金信治
7 新出の「庭訓往來」古写本の筆者 中村武三
8 臨書と創作―井上有一の作例から 海上雅臣
◆第10回大会(京都女子大学)発表題目
1 異論・楷書の書法 矢内斉
2 楊守敬の来日とその影響に関する幾つかの問題 杉村邦彦
3 細井広沢門流の研究 岩坪充雄
4 北方心泉に関する一考察 野上史郎
5 江戸和様書家の王羲之受容について 鈴木晴彦
6 書法美学範疇語(遺題)考 河内利治
7 殷代の学書について―甲骨文字における「習刻」と「法刻」 松丸道雄
◆第11回大会(日本教育会館)
◆第12回大会(埼玉大学)発表題目
1 梁啓超碑帖跋 中国国家図書館蔵本について 高澤浩一
2 郭店楚簡「唐虞之道」「忠信之道」の文字学的検討 福田哲之
3 書写の継承 家人博徳
4 江戸時代の出版と書の手本 岩坪充雄
5 米山の書についての一考察―その臨書と制作 鄭麗芸
6 「古筆端切」形成の一要因 高城弘一
7 色紙の表装の変化についての一考察 杉浦妙子
8 何紹基の篆隸観 甲骨発見以前の金石学 大野修作
9 熊野類稿紙筆跡の再検討―原本が模写かの鑑識の方法 古谷稔
10 走馬樓簡牘研究の現状 田中有

Today's
Feature

最近の中国木簡研究事情

大庭 脩

中国の木簡は、一九〇一年に、アウレル・スタインが二月三日にニヤ
XV遺跡で晋簡五〇点を発見。その一ヶ月後、スウェン・ヘディンが、旧
ロプノール北岸の古楼蘭で晋簡一二一点を発見したのが、世に現われる
きっかけとなったことから、昨二〇〇一年八月に、湖南省長沙で百周年
記念の学会が盛大に開かれ、この学会の成果は今年公刊される予定にな
っている。

私は、木簡を説明するとき、その出土場所から、墓葬の木簡と、フイ
ールドの木簡とに大別して説明することになっているが、近年の研究報告
では、二〇〇一年一月に『張家山漢墓竹簡（二四七号墓）』が出版され、
これに先立つ一九九九年九月には、『長沙走馬樓三国呉簡 嘉禾吏民田
家簡』上下が出た。長沙の呉簡の出土を記念して、去年の学会は長沙で
開催されたのである。

長沙の報告書は巨大なもので、机上に持ち上げるだけでも重労働であ
り、老人の研究に適さないが、第二篇が近い内に出版されるらしいので、
「又、大きいのか」と尋ねたところ、収める簡が小さいから本も小さいと
いうことであった。

敦煌懸泉置出土簡については、『敦煌懸泉漢簡積粹』が出ているので、

正規の報告書も近く見ることができようであろう。

また、台湾では一九九八年五月に『居延漢簡補編』を出版した。これ
は赤外線テレビを用いて不明文字を釈読したもので、居延旧簡に対する
補編である。

居延新簡については、一九九四年一二月に『居延新簡—甲渠候官』二
冊のみが出ている。

これらがフィールドの木簡の報告書であるとする、墓葬の木簡では、
一九九七年九月に『尹湾漢墓簡牘』が出た以外は、みな戦国時代の簡で
あることが大きな特色であろう。秦簡と楚簡の研究が典籍を中心に進み、
一方墓葬の簡牘を中心に、日書^{にっしよ}の研究が発展している。

簡牘研究の問題点の第一は、積文・写真の発表が遅いことで、出土簡
牘の物理的整備その他に時間がかかるのは止むを得ないが、それ以外の
人間的要素によって遅延するのは、科学的ではない。最初に簡牘に接し
得る幸運と榮譽に対し、社会的責任を速やかに果たす必要がある。一方、
報告書、ことに写真と発掘経過を合わせた報告については、きっちり行
われるようになってきた。研究者側は、写真を伴わない積文のみの簡報
に徒らに興奮せず、積文と写真をつき合わせて是非を検討する必要があ
るし、出土状況をよく考察し、報告書の積文の配列も十分再検討せねば
ならない。また、積文の発表を鵜呑みにして立論するようでは、日本の
研究は所詮二番煎じに甘んじる時代に入ってきたことを、認識し、戒め
ねばならない。

※編集部注 日書とは占卜書、うらないの言葉を書いた書物のこと。

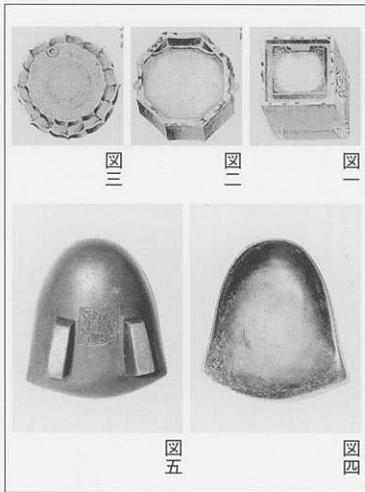


唐の歙州硯について

藤木 正次

歙州石がいつ頃発見されたかは、宋の治平三年（一〇六六）ごろ上梓された唐積の『歙州硯譜』によれば、「婺源硯在唐開元中獵人葉氏、遂歙至長城里見壘石如城壘狀。」（婺源の硯は、唐の開元中に在りて、獵人葉氏、獸を逐いて長城里に至り、壘石の城壘狀のごときを見る。）とあることから、唐の開元年間（七一三〜七四一）に発見されたことが、伝えられている。そして同書には、さらに、この石を携えて帰り、大まかに彫琢して硯にしたとの記述があり、また「温潤太過端溪。」（温潤なること大いに端溪に過ぐ。）と著して、端溪の硯はさらにそれ以前から存在していたことを述べている。つまり唐代開元年間になって、端溪、歙州の二大名石が出揃ったことを意味している。それはまた、陶硯から石硯への移行を促進させることにもなったであろう。

唐時代の石硯の硯制はどのようなものであったであろうか。清の乾隆帝の勅撰になる「欽定西清硯譜」には、「陶之属」に四点、「石之属」に三点の唐の硯が載っている。石之属の三点は、「褚遂良端石石渠硯」^四、「觀象硯」^{四二}、「菱鏡硯」^{四三}である。「褚遂良端石石渠硯」は、四方周囲に渠をめぐらした、いわゆる「石渠式」で、他の二点も「石渠式」あるいは「石渠式」から変化・発展した硯制を見せている。材は、先の二点が端溪石で「菱鏡硯」は歙州



石である。因みに「陶之属」の四点も「石渠式」である。「石渠式」は、後漢時代の硯身の周辺に渠のある陶硯の出土例からみても、古い硯制であることが窺える。

また、唐時代には「鳳池硯」と呼ばれる硯制が存在する。頭部を円く、墨池は白状を呈し、硯背に方形の二足を施し、硯面後部から墨池にかけて急勾配の傾斜をつけている。この硯制は、六朝の晋代ごろに創案され、唐代において完成し、中唐から晩唐にかけて盛行した。我が国にも数点、伝世品が存在する。特に、唐朝内府に収蔵されていたことを示す「広納府」の方印が刻されている「鳳池硯」^{四四}などは、強烈な個性といい、最も完成された硯相をみせている。しかし、これら「鳳池硯」は、その大方が端溪石である。こうした「石渠硯」と「鳳池硯」は、唐時代を代表するものといえよう。

先に示した「欽定西清硯譜」に載っている三点の石硯であるが、現在、台湾の故宮博物院にある「觀象硯」の他二点は、所在不明になっている。従って確証ある唐代の歙州硯は、現物を見ることができない。ところが近年、我が国の収蔵家が、「歙州石の鳳池硯」^{四五}を所持していることが判明した。縦十五センチ、横十三センチ、高さ三センチで、やや小振りであるが硯相も端正で高度な作硯技術が施されている。硯背の二脚の位置や高さ、開脚の状態なども申し分ない。石色は蒼黒で透徹感があり、石紋は水波羅紋、墨池のところは渦を巻いているようである。質は堅密で叩くと高音を発する。北宋の著名な硯癖家である唐詢が著わした「硯録」の「歙州婺源縣龍尾石其石最多種。性皆堅密叩之有聲。蒼黒者佳而、色之淺深蓋不一焉。其理或如羅紋或如竹根之横文。」（歙州婺源の龍尾の石、其の石、最も多種なり。性は皆堅密、之を叩くに聲あり。蒼黒なるは佳にして、色の淺深は蓋し一ならず。其の理は、或は羅紋のごとく、或は竹根の横文のごとし。）に符合する。また、先に引いた唐積の『歙州硯譜』にある「壘石如城壘狀。」という表現は、水成岩特有の、石が重層を呈しているとのことであろうから、水波羅紋の石紋に一致する。したがって、ここに唐時代の歙州硯の存在を実際に確認することができたことは、硯石文化史において大きな意義といえよう。

随 想
先達を想う

西川寧先生 生誕百年に思う

田中 有

本年は西川靖盒先生生誕百年にあたり、七月三十日より記念展が東京国立博物館で開催される。より多くの会員の皆さんにご来観いただきたいと思う。

先生は平成元年五月、本学会の発足を待たずに逝去された。生前、本学会結成の動きに非常な関心を寄せられ、期待されていた。この十年間の活動ぶりをご覧になったら、何とおっしゃられるであろうか。きっと喜んでくださるにちがいない。学会とはこんな御縁もあったのである。

さてこのたびの展覧は、先生の書作家としての業績を示すべく、書作品が中心となるが、単に鑑賞するだけにとどめられないものがひそんでいることが知らされよう。

かつて木簡研究の大家、故森鹿三先生にお会いした折のこと、盃を重ねて歓談久しくするうち、私が西川門にあることを知られるや、「それはよき師を得たものだ。西川先生の作品はよう観とるよ。時には金文の解釈に異論もあるが、…」と言われた。たしか一例をあげられたはずであるが、お恥ずかしいことに今は覚えていない。当時はただ、作品を研究成果として受けとめる、こんな見方もあるのだと感嘆するばかりであった。



西川氏

た。このところ記念展の準備にかかわっていて、せっかくの誌面にとりよめのない宣伝文のようになってしまった。どうか御寛恕いただき、是非、観に来ていただきたい。

後日、靖盒先生に報告すると、先生は莞爾として我が意を得たりという風情で、ご機嫌であった。

確かに先生の書作にあたっての徹底した草稿作りは、研究者としての取り組みであった。とくに興味ある新出土資料に対しては、書作が目的であっても、それについて知り尽くさねばやまない探究が試みられ、多くの時間を費やされる。自らも書く前のこれが楽しいと言われていたように、考察するうちに燃えあがっていき、書作の筆をとられたのである。今回もその一端が展示される予定である。会員諸氏にも資するところが大きいのではないだろうか。

新出土資料といえば、昨年は簡牘発見百年の記念の年であった。これからも陸続と出現するであろうが、ある時、話が居延漢簡に及び、最後に「どうも私の木簡は敦煌に尽きるといつてよい。これからの新出土は若い諸君がやらなければ」としめくくられた。書道史を新たにする資料であることは誰しも認めるところであるが、先生の課題に応え得るのが本学会であることはいまでもない。また学生の卒論指導に、「書に関する研究テーマはいくらでもある。常識と悪いことであるものにも未解決の問題が多い」と言われたこともある。大会での諸氏の発表を聞き、論考を読むにつけ、あらためて先生を思い出し、みんなが答えを出している」と勇気づけられている。

このところ記念展の準備にかかわっていて、せっかくの誌面にとりよめのない宣伝文のようになってしまった。どうか御寛恕いただき、是非、観に来ていただきたい。



新知見の宝庫

— 西林昭一著 『中国新発見の書』 —

中村 伸夫

ささきごろ本会前理事長西林昭一氏が『中国新発見の書』（柳原出版）を上梓された。同氏による前者『中国新出土の書』（二玄社）の続編の体裁をもつ充実した内容の一書である。

氏は「中国新出土の書」の「あとがき」で次のように述べている。「地広物博の中国では、今後も陸続と出土文物が報告されるであろう。おそらく本書も、十年後には補訂の必要に迫られるだろう。いや、書文化のひろがりのためには、むしろ、改訂が必要なものほどの新しい知見こそ望ましい。」

『中国新出土の書』の奥付には、一九八九年二月十日初版発行、とあり、今度の新刊発行との間には一三年余りのひらきがあるが、「あとがき」にいう補訂の必要は、この一書をもって果たされたことになろう。

『中国新発見の書』の「あとがき」に、「あれから一三年しか経っていない。しかしこの間、IT社会に突入し、世の移りゆきは、従来の一世紀に匹敵する変貌をとげている。それに呼応するわけでもないが、本書に取めた史料は、これまでの知見を超える画期的な発見が多く含まれている。」とある。事実、この一三年の間に発見された新たな書法の史料、あるいは、以前の発見品でありながら、この一三年の間にはじめて紹介された書法の史料には、われわれの眼を驚かせるに十分なものが少なくない。

その中には、戦国時代の楚や三国時代の呉の簡牘

文字史料群のように、漢字書体の変遷を考究する上で、質量ともに従来になかった大規模な新史料として提供されたものもあれば、顔真卿や張旭といった世に名高い能書家にかかわる新史料もあり、また、これまでも知られていた史料を補強する上で価値の高い新史料もある。

考古学的な発掘品はもちろんのこと、今日の中国が国をあげての普請中であるがゆえに、偶発的に世の中にあらわれる運命となった新史料もおびただしい。

本書は、〈丁公村陶片刻字〉、〈秦駟玉版〉、〈骨筭〉、〈郭店楚簡〉、〈懸泉置簡帛・紙書・壁書〉、〈尹湾簡牘〉、〈走馬楼呉簡〉・・・とつづくこれらの新史料の図版のべ八百五十点を精選し、それぞれに解説を加えたものである。

中国新発見の書

西林昭一



新史料の書蹟に対する旺盛な探求心、そして史学者としての該博な知識、さらには可能な限りの現地調査と実物精査に努力を惜しまないフィールドワーカーとしての行動力を兼ね備える著者にしてはじめて可能な労作であるといつてよいだろう。

『中国新出土の書』の場合と同じく、各項目ごとの解説文の後半には、書体あるいは書風に関する短評が加えられているが、例によって、内実をついた鋭い評語が光を放っている。

たとえば、近時話題をよんだ顔真卿四一歳時の作〈郭虚己墓誌〉（七五〇年）について、「報告書は、〈郭虚己墓誌〉を『字体は端莊工精、刻工は十分精細』と評している。しかし、原拓によって仔細に検証すると、一字の結構はときに背勢をとり、また波法の扱いに一貫性がなく、統一感に欠ける憾がある。なお後半の下半部には、刻技のいたらない字が目につく。」と述べられていることである。

『中国新出土の書』という画期的な名著の恩恵を受けてきたわれわれは、今新たに『中国新発見の書』という、より情報量の豊かな重宝な書物を座右に置くことができるようになった。

もちろん、これらの新情報は、ただ単に新情報としてとどまるべきものではない。従来の書法史の俎上に乗せてその価値を見きわめ、新たな書法史の構築のために役立たせるべきものである。著者の解説文の行間からも、その種の熱いメッセージを読み取ることが出来る。

『新出土』同様、この『新発見』も、書法史を学ぶ者にとつてはもちろんのこと、漢字書法の作品づくりに精を出す人々にとつても、あるいは新たな書美の認識へのいざないの書として、あるいは新たな表現意欲をかきたてる誘発の書として、大きな役割を果たすに違いない。

談話室

手習詞歌通説の再検討 森岡 隆

仮名書道発達に寄与したのであろう手習歌の変遷について、検証を続けている。まず安積山の歌について、「古今集」仮名序で難波津の歌と並称したのは紀貫之の創作かと指摘したが、「水莖」(29号)、あめつちの詞や大為尔も文芸上の遊戯と見たほうがよい。「宇津保物語」国譲上ではあめつちの詞を手本に用いたと記すが、並記された他の歌も含め当時の普遍的な手習歌の様を示すものではなからう。難波津の歌からいえるは歌への移行こそが手習歌の変遷であり、右のすべてを手習詞歌とみなす大矢透以降の通説を訂正したい。

上海で必見の書画展 富田 淳

この秋、上海博物館は創立50周年を記念して、「晋唐宋元書画国宝展」を開催する。北京故宫博物院・遼寧省博物館の協力を得て、3館の所蔵

する歴代の主な名品を精選して展示するというから、さぞかし見ごたえのある充実した展覧となるだろう。晋から元の時代設定もスゴイが、館を挙げての一大企画に書画をテーマとするあたりもスゴイ見識である。もとより国外持ち出しを禁じた国宝級ぞろいの同展が、日本に来ることはまずあり得ないので、何とか都合をつけたいものだと思っている。(於北京)

不手非止同人 柿木原くみ

さわやかな5月の午後、大森の富田美術館「古川悟遺作展」の会場で、「出身が雪の深い処だから、作品には明るさを求める」とおっしゃっていたことを思い出しながら拝見した。「富岡鉄斎 仙境の書」(野中浩俊著)を拝読しながら、文人の鉄人「鉄斎」の氣に圧倒された。手元の「大正8年度大日本畫家見立鏡」を見ると、別格の老功大家の項に「鉄斎」の名を発見。同項に他には不折がいた。「中国新発見の書」の西林先生、古川先生、野中先生、みんな不手非止同人。

一碑一面貌 小川博章

少し気になることがあったので、仕事の合間に書文化センター(調徳大学)で造像記の拓本を調べてみた。ここは北魏の造像記だけで200点以上所蔵されているから、その全てに目を通したわけではないが、実に様々な書風が展開されている。龍門石窟や熾県碑廊のイメージだけで「北魏風」とか「北魏の造像記」などと一括りにしていた自

分が恥ずかしくなった。影印本に紹介された資料だけで、世界を作っていたと思いついた。

伝寂蓮筆「榊原切」 高城弘一

昨年の秋、平成の名物切として、伝寂蓮筆「和漢朗詠集」の零本が好事家に分割、頒布された。その名は「榊原切」。この古筆切の名称は、旧所蔵者・榊原子爵家が越後高田藩主(現・新潟県上越市)であったことに因む。この寂蓮様「榊原切」の有難いことは、巻末に詩歌と同筆にて、「建久三年二月十八日午時書了」とあり、書写した時期が判明するという点に尽きよう。建久3年とは、西暦1192年のことである。流行に遅れぬよう、一葉落手しておいた。

◆会員動静

- 青山浩之会員 横浜国立大学教育人間科学部助教授昇任
- 池田利広会員 大阪教育大学教育学部助教授昇任
- 高城弘一幹事 大東文化大学文学部書道学科助教授新任
- 豊島嘉穂会員 四国大学文学部書道文化学科教授新任
- 興膳宏理事長 「乱世を生きる詩人たち」六朝詩人論を研文出版から上梓。
- 野中浩俊監事 「富岡鉄斎 仙境の書」を二支社から上梓。
- 横田恭三理事 跡見女子大学文学部助教授昇任
- 松清秀一会員 鹿児島大学教授昇任
- 東賢司会員 愛媛大学助教授新任
- 田中有副理事長 「14年度日展5科新審査員就任

新入会員紹介(平成13.5.14.3)

- 鈴木純孝(道明) S 4
- 室之園裕美 S 50 県立高講師
- 吉野太一(秦堂) T 13
- 河野隆(鷹之) S 23 大東文化大専任講師
- 本間一洋 S 50 淑徳大院生
- 五野節子(雪香) S 16 高校講師
- 樋口咲子(竹城) S 40 千葉大講師
- 萩信雄 S 25 安田女子大助教
- 陳福坡(南天) T 11 在日
- 峯岸佳葉 S 53 筑波大院生
- 増田知之 S 50 京都大院生
- 田室利雄(西崖) S 10

【訂正】会報第2号「書学藻塩草」に寄稿いただいた野中浩俊氏による「鐵齋の書翰解説」は「鐵齋の書翰解説」の誤りでした。訂正します。

編集後記

◆会報第3号をお届けします。ご多忙の中、ご寄稿下さった各位に深謝申し上げます。事務局長のご発案で、新任2名を含む5幹事(本付付)のフレキシブルなパワーをこの2回の会報に結集して学会の活力の源にしようということになり、4月29日から新体制が始動、本号の実務は既に幹事諸氏に委ねられております。

◆新設の「談話室」も、そうした中から生まれた新機軸です。今回は時間の関係もあり幹事諸氏にそれぞれ「書き込み」願いましたが、今後も特に次代を担う若い会員の皆さんを主役にするコーナーに育てていきたいと思っております。

◆誌幅の都合で、「学会たより」は次号送りとしました。(鈴木晴彦)